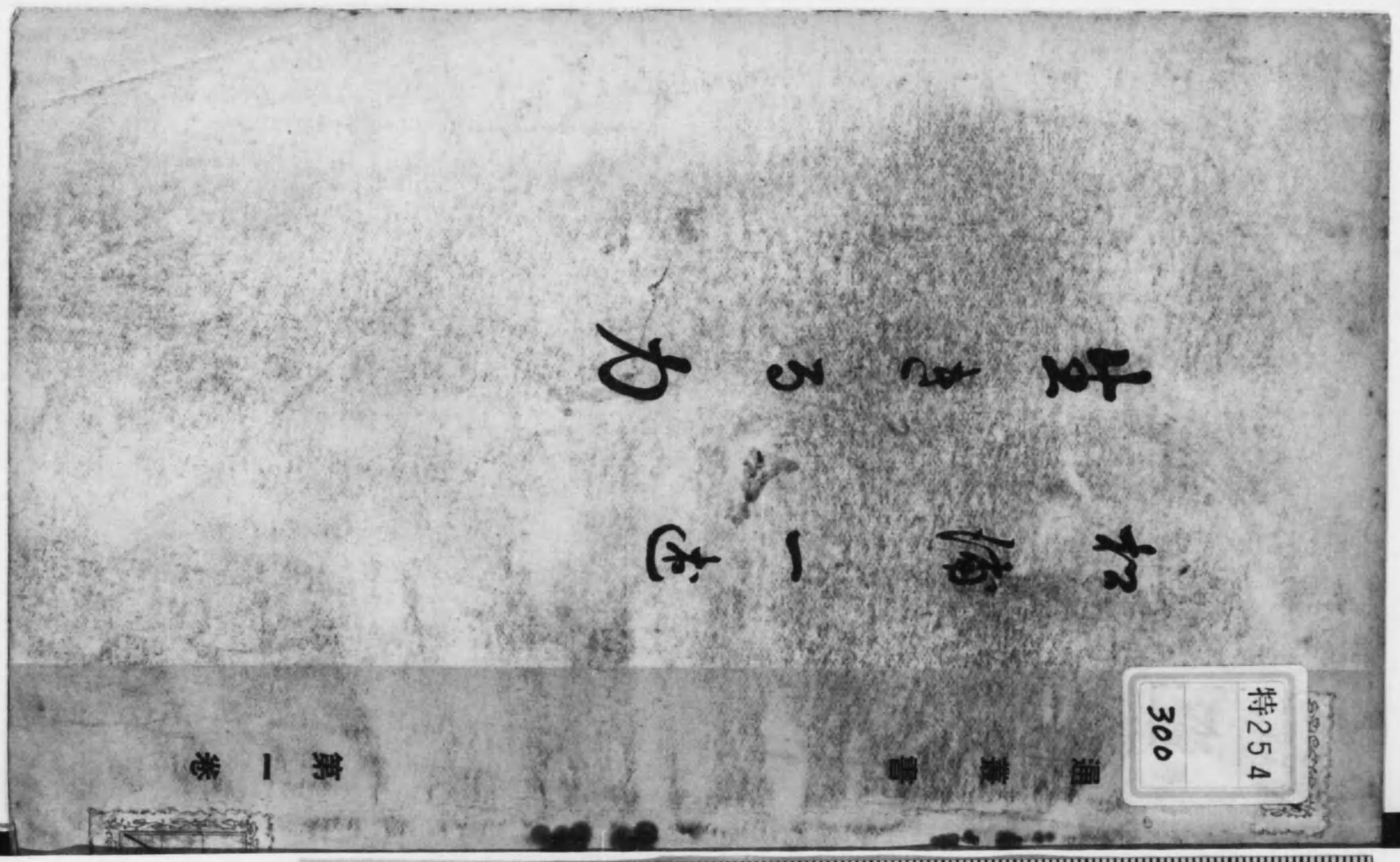
岡崎帰
特254
300

右

うつゝとは
聖徒え山こえ
移ゆく

人にうつしひ
仏の杖

一

松浦一先生と題歌

特254
300

大正大學教授 松浦一述

生きる力

傳通院・傳通會館發行

昭和二十四年納本

はしがき

生命健やかなる處には喜びがあります。喜んで生きることは萬物最上の恵みです。御佛は永遠に健やかなる永遠の生命です。御佛の道は永久の喜びに永久に生きる道です。この生命とこの喜びとには、物を隔てる一枚の扉さへもありません。併しこれは見得る者のみに見られます。開眼は常に人間一生の第一の大事です。

昭和十年十二月六、七日傳通會館では同館の大衆佛教講座に併せて釋尊成道會講演を催され、これを私に依頼致されました。在家とはいへ、うれしくも御佛に縁深き私です。喜ん

で貧しき私の燈火を聽衆の前に捧げました。その講演の題は「生きる力」といふのでした。生きる力の問題は常に開眼の問題です。

傳通院及び同會館ではその速記を冊子として刊行し、普く希望の方々に捧げんとして居られます。讀者がこの書を讀まれる間に、若しその文字の殼を破つて私の生命の鼓動に觸れられることがありましたらば、その時こそは私も御佛の光の中で安き心地のする時です。御佛には生命の言葉はありますが、言葉の言葉はありません。

昭和十一年一月

松浦一識

生きる力

松浦一述

第一講

十二月八日はお釋迦様が明けの明星を御覽になつて悟りを開かれたといふ大切な日であります。即ち成道會としてこれを記念し、法會を營む。それに就いて、こちらでも本年は私に今日と明日と二日續いて、何かお話をするやうにとのことでありました。私はこちらへは度々參つてお話を致しますが、かうやつて佛様のお德を偲び、又、吾々自身如何にして生きて行くべきか、それに就いて考へもし、戒めもして、お話をすると

いふことは、誠に喜ばしい次第であります。

西行法師の名高い歌に、

年たけてまた越ゆべしとおもひきや命なりけり小夜のなか山

といふのがあります。この前にこの小夜の中山を越えた時には、年をとつてからまた此處を越えるやうなことがあらうなどとは思ひもよらなかつた。それだのに、今またかうして此處を越えることが出來るといふのも、生命あればこそのことだ。と、生きながらへたことの惠みをしみじみ感じた心の歌です。

今では餘程前のことになりますが、私はかういふ歌を詠んだことがあります。

めぐりあふ春のあしたよ美しき夢は見果つることもあらなく

春になつた。この春の朝を迎へて、私には、暫く離れてゐた親しき人に思はず廻りあつた、といふやうな氣持がする。誠に幸に廻りあへたといふ氣持。これは當然會ふべき者に、當然會ふべき時に於て、何の不思議もなく會つたといふ氣持とはおのづから異るものです。此處でも「命なりけり」です。このやうにしてこの日を送り、このやうにしてこの春を迎へ、心に結ぶ美しき夢は何時見果てるといふこともない。

人間苦の重き歩みを一日々々と續けて來、今日も先づ無事に暮せて有難かつた、と感謝の念の起る處に、西行のこの「命なりけり」は限りなき妙味を以て味はれます。又、人事無常といふことをしみ〴〵と思ふ時にも、この「命なりけり」は心の底にしみ透る響を立てゝ響きます。現にこの成道會といふやうな大きな意味の事柄に出會ふことが出來ますのも、あだやおろかな事ではありません。私は今お話の題を「生きる力」として置きました。問題はやはり「生きる」といふことに歸してしまひ

ます。生命があつたればこそ小夜の中山もまた越えられた。生命があつたればこそ春の朝にまた出會ふことも出來た。悉く皆生命の問題、生きるといふことの問題、生きて居られたといふことの問題、人間の事柄でこの生きるといふ事、生きて居たといふ事、凡て生命に關はる事程大きな問題はありません。その「生きる力」といふこと、佛樣の事に關聯してお話をします時にも、この力の出所、この力を支へ行く道、この力をまたこのお話の柱として、今日と明日との尊い時間を皆さんと御一緒に過したいと思ひます。

先達中電車の中の廣告などで私達も知つたことでありますが、西國三十三箇所の觀音樣の出開帳といふことがありました。一日電車やバスで市中のその場處を駈け廻り、一日暇をつぶしさへすれば西國三十三箇所の觀音靈場に參拜が出來るといふ至極簡便なものであります。それにはそれでまたその意味もありませうが、併し本當に巡禮の旅姿をして西國三十三箇所の靈場を順々に經廻つて行くあの本格の巡拜と比べてみますと、それは大變趣が違つてゐるといふことが分りませう。その巡拜は觀音靈場のことでありますが、それと同樣に四國八十八箇所の弘法大師靈場を巡拜する四國遍路といふのがあります。四國遍路はまた四國邊土とも申します。三十三箇所の巡禮でも、八十八箇所の遍路でも、その難行苦行は並大抵のことではありません。疲れた體、痛む足を引摺つてゞも、險しい道を踏んで行き、遠く離れた處へ辿り、身を投げ出して行かねばならない。これが、一日市中を電車やバスでぐるりと廻つて、それで全部の參詣を濟すといふ事と、どんなに違つたものであるか、といふことは申すまでもないことではありますが、私はこゝにその違ひの最も著し

いものに就いて考へてみたいと思ひます。

あの巡禮、遍路の姿の笈摺や笠などには、同行二人と書いてあります。同行二人といふことは自分の他にお連れがもう一人あつて二人連れであるといふことですが、その一人のお連れといふのは、觀音様へお詣りする時には觀音様であり、大師様へお詣りする時には大師様でいらつしやる。觀音様が道連れになつて下さつたりして、大師様が道連れになつて下さつたりして出來上つた同行二人。觀音様と一緒に歩き、大師様と一緒に歩く。それだから、あの難行苦行の旅も出來る。實際、二人三人四人五人、人間同志一組になつて行く場合もありませうが、人間が幾人一緒になつて行きましても、その一人々々が同行二人。その銘々が觀音様と道連れとなり、或は大師様と道連れとなる。それであるから、心の汚れ、身の汚れは、己れの中から淨め去られ、我が身に嘗て覺えなかつた不思議な力が湧き出して、痛む足でも金剛杖の金剛力に引かれては行く。四國遍路をした人の話に依りますと、宿に着きますと、自分の足をすゝぐ前に金剛杖を洗ひ淨め、部屋の中でも一番清い處に置く、といふことです。この生命の力となります金剛杖は取りも直さず同行二人のその一人である大師様でもあるといふことなのです。この同行二人、自分と觀音様との固い道連れ、自分と大師様との固い道連れ、この際この上もなく有難く、この上もなく頼もしく又尊いこの大いなる事柄が、この廣大なる力の感じが、その威力が、その全靈の恐ろしき力が、市中出開帳のお詣りのあの簡便な一日の乘車の旅でも味はれることでせうか。

「同行二人」で味はれるこの大いなる事柄を私は尚考へてみたいと思ひます。

私は始めて親鸞聖人の臨終のお言葉といふものを見ました時に、異常の感激に打たれました。それは、

我が歳きはまりて、安養浄土に還歸すといふとも、和歌の浦曲の片雄浪の、よせかけ〳〵歸らんに同じ。一人居て喜ばゝ二人と思ふべし。二人居て喜ばゝ三人と思ふべし。その一人は親鸞なり。

といふのであります。この世の命數が盡きて私はお浄土へ歸つて行つても、始終影身に添うてゐるぞよ。一人居てうれしと思ふ時は二人居ると思へ、その一人は私だ。二人居てうれしと思ふ時は三人居ると思へ、その一人は私だ。何といふ力強い言葉でせう。私には幾度讀んでもこの力の感じは衰へない。その恐ろしい永遠の迫力で常に新しく心を打つ。さうして又何たる美しい言葉でせう。さうして又本當に有難い。これは有難い親心です。この親心といふものは廣くして深く、普通一般の世間にも亦見られるものであります。親が亡ならうとします時に、子供に對つて、「私が居なくなつてもお前達をあの世でもつて護つて居るよ」と言ふやうなこともありませう。あの世に行つて護つて居る——これは親子の間でなくとも亦聞かれる言葉であります。この國を護つて居る。この人を護つて居る。これは單に亡ならうとする時ばかりには限られてゐない。「私はお前の側を離れて居ても蔭ながら護つて居るよ」。此等は皆一からげにして親心と言へるのです。假令それが兄弟の間でも、夫婦の間でも、其他どのやうな間柄でも。「一人居て喜ばゝ二人と思ふべし。二人居て喜ばゝ三人と思ふべし。その一人は親鸞なり。」聖人の親心は大きくして力あるものでした。前に述べた「同行二人」の處では、その一人が觀音樣であり或は大師樣でありました。親鸞聖人のお言葉の「その一人は親鸞なり」の「その一人」も亦それと同じやうに

なるのであります。その力強さ、頼もしさ、有難さ。

私は又法然上人がお亡なりになる少し前にお弟子に仰有つたお言葉の一つを殊に大變有難く思つて居ります。法然上人は建暦二年正月二十五日にお亡なりになりましたが、その正月二日からお氣色が大變お惡くなつて來て、今度はどうしてもいけまいといふ御樣子が見えて來た。その後の事であります、法蓮房といふお弟子が、「古來の先德みなその遺跡あり。しかるにいま精舍一宇も建立なし。御入滅の後、いづくをもてか御遺跡とすべきや。」とお尋ねした。即ち、昔からの德の高い偉いお方は皆何處かに遺されたその跡がある。それであるのに今お寺の一軒もお建てになつて居らない。お亡なりになつてからは何處をお上人樣のお跡と申してよろしいのですか、といふのであります。それに就いての上人のお答は、

あとを一廟にしむれば遺法あまねからず。予が遺跡は諸州に遍滿すべし。ゆへいかんとなれば、念佛の興行は愚老一期の勸化なり。されば、念佛を修せんところは、貴賤を論ぜず。海人漁人がとまやまでも、みなこれ予が遺跡なるべし。

といふのでありました。我が跡を一箇處の廟にちやんときめてしまへば、我が遺した法は世の中に遍く傳はるといふ譯には行かなくなつてしまふ。だが我が遺した跡は州々の何處にでも漏らす處なく行き渡ることであらう。何故かと云へば、念佛を唱へるといふことは我が一生の教化であつた。だから念佛を唱へる處でありさへすれば、身分の高い低いの區別はなく、海人漁人の苫屋までも皆我が遺した跡であるぞよ。といふことであります。お念佛の聲のする處は皆私の遺した跡であるから、其處には

どのやうな處でも私が居るぞ、と仰せられたのであります。「同行二人」の一人が觀音様或は大師様であるやうに、順禮又は御遍路さんには何時何處でも觀音様又は大師様が附いて廻るやうに、お念佛のある處には何時何處にでも上人様がおいでになる。只今皆さんはお念佛をお唱へになりましたが、其處にもう法然上人が來ておいでになられるのです。皆さんの側にちやゝんと坐つて居られるのです。その力强さ、頼もしさ、有難さ。普通の世の中では容易には見られないその力强さ、頼もしさ、有難さが此處には附いて廻つてゐます。

日蓮聖人が流されて佐渡に居られました時、北條氏の一族の彌源太といふ人にお遣はしになつた彌源太殿御返事といふ御文にはかういふ事が書いてあります。

又御新藏のために御太刀、同刀、あはせて二送給はつて候。此太刀は、しかるべきかぢ(鍛匠)作る歟と覺候。あまくに(天國)、或は鬼きり(切)、或はやつるぎ(八劔)、異朝には、かむしやうばくや(干將莫耶)が劍に爭かことなるべきや。此を法華經に進らせ給ふ。殿の御もちの時は惡の刀、今佛前へまいりぬれば善の刀なるべし。譬ば鬼の道心をおこしたらんが如し。あら不思議や不思議や。後生には此刀をつえと頼み給べし。法華經は三世の諸佛發心のつえにて候ぞかし。但し日蓮をつえ柱ともたのみ給べし。けはしき山あしき道、つえをつきぬればたをれず。殊に手をひかれぬればまろぶ事なし。

「後生には此の刀を杖と頼み給ふべし。法華經は三世の諸佛發心の杖にて候ふぞかし。但し日蓮を杖柱とも頼み給ふべし。嶮しき山あしき道、杖をつきぬれば倒れず。殊に手をひかれぬればまろぶ事なし。」——御遍路

さんの處で見た金剛杖は、こゝ日蓮聖人の處では、刀となり、法華經となり、聖人御自身となつて居ります。その力强さ、頼もしさ、有難さ。

法華經の觀世音菩薩普門品は普通觀音經と申してゐるものであります。申すまでもなく大變有難いお經でありますが、その中でも殊に水際立つて清く大いなる響を立てゝ鳴り出してゐるやうに覺えます處は、

妙音觀世音、　梵音海潮音、　彼の世間音に勝る。

といふ言葉でもつて始まつてゐる處であります。妙なる音とは騷がしく狂はしい世間の音即ち世音をお聞き分けになつて世人の惱みをお救ひ下さる觀音樣のことであります。梵音とは清淨の音即ち妙音と同じもので ありまして、海潮音とは海の潮のさし引きの音、即ち世間の救ふべき人に應じて適切に慈悲の御手を垂れさせ給ふ觀世音のことであります。即ち妙音觀世音も梵音海潮音も共に觀音樣のこと、さうして世間音を以て世間人を現します、或は世間生活を現します。音といふもので物の生命或は生活を現してゐる、これには大變面白く又深い意味があると思ひます。私はこれに就いては今迄に度々話しもし書きもしたことがありますから、此處では別に申しません。「妙音觀世音、　梵音海潮音、　彼の世間音に勝る。」續いて、

是の故に須く常に念ずべし。念々に疑ひを生ずること勿れ。觀世音は淨聖にして、苦惱死厄に於て、能く爲に依怙と作る。

それであるから觀音樣をば常に念じて、一念々々にも疑ひの心などを起してはならない。觀音樣は淸淨な尊い佛體であらせられて、吾々が世の中の樣々な惱み、苦しみ、災厄、死といふやうなものに出會つても、大丈夫な據所となつて下さる。本當に大きなものに對面する心持が致し

ます。依怙といふ言葉は普通世間では依怙贔屓だの依怙地だのといふ悪い意味の處に用ひますが、本來依はたよるといふこと、怙はたのむといふことでありまして、依怙とはたよりにし、たのみにすることであります。たよりにし、たのみにする心の傾け方が正しくありませんと、偏頗なことになつて來まして、依怙贔屓などといふ悪い依怙ともなつて來ます。片々に傾き過ぎて悪くなつた依怙が氣質となつて來ますと、片意地即ち依怙地となります。此等は皆依怙を邪にしたものでありますが、觀音樣の依怙はそんなものではありません。「觀世音は淨聖にして、苦惱死厄に於て、能く爲に依怙と作る。」どのやうな忌はしいやな事にぶつかつても、觀音樣にお頼み申せばよい、それを據所とすればよい、といふやうな誠に頼もしい佛樣だ。そこでお經には前の言葉に續きまして、

一切の功德を具し、慈眼をもつて衆生を視たまふ、福聚の海無量なり。是の故に應に頂禮すべし。

とあります。一切の功德をお具へになり、慈悲の御眼で世の人々を御覽になる。その福德の限りなきこと果知らぬ海のやうなものがある。それであるからよく拜み奉れ。といふのであります。どのやうな場合、どんなに苦しい場合でも、據所になれるといふ事、これがどんなに大した事であるかといふことは、お互この娑婆世界に住んで居ります者が、この世界には頼み少ないことが如何に多いか、といふことを思ふ時、一層はつきり分つて來ます。脆きは人の常であつて、この人の世にあつて、本當に安全だと云つて凭れ掛かれるものゝ何がありませう。苦しみと云ひ、惱みと云ひ、死と云ひ、又厄と云ふ、辛い苦しい時に當つて、此處に凭れたならば、此處にたよつたならば、大丈夫といふ金剛杖となるものは、この世の人の何處にありませう。これはいゝお方であると一生懸命に縋

つてゐると、俄かの病でその人があの世へ行つてしまひますと、後はこの世に淋しい姿で己れはおいてきぼりになる。さういふ事さへある世です。夫にたよつてゐる妻は、夫が死んでしまひますと、それで杖を取られてしまふ。子供にたよつて居ります親は、子供が死んでしまひますと、やはり杖を取られてしまふ。友達をたよつて居りました人は、その友達が消えてしまへば、直ちに哀れな姿となつて、取り殘されてしまひます。況んや變り易きは人の心。人を頼んで人に裏切られ、人を頼んで人に棄てられ、人のたよりなさを思ふ時、観音様は苦惱死厄に於て能く爲に依怙と作る。人のみの世界に於て何處に安全が得られませうか。金錢も依怙とはなれない。權力も依怙とはなれない。健康も依怙とはなれない。自分自ら自分のもので依怙となるものはありません。さういふたよりない時に、金剛杖が不用だと言はれませうか。險しい旅は唯御巡路さんの旅ばかりではない。巡禮の旅ばかりではない。吾々は悉く日々四國巡りをしてゐるのです。西國廻りをしてゐるのです。――「観世音は浮聖にして、苦惱死厄に於て、能く爲に依怙と作る。一切の功德を具し、慈眼をもつて衆生を視たまふ、福聚の海無量なり、是の故に應に頂禮すべし。」

大師様は頼もしいお方であつた。法然上人も頼もしいお方であつた。親鸞聖人もさういふお方であり、日蓮聖人も亦さういふお方であり、其他聖と仰がれる方々は皆さういふ頼もしいお方であつた。而も其等の方々も人と生れた方であるから金剛杖を持つて居られた。その方々はその方々でやはり佛様の金剛杖を持つて居られた。

「観世音は浮聖にして」と云ふ。浮は浮土の浮、聖は聖者の聖、この有難い文字を二つ連ねて浮聖、こゝに佛様を現す意味が出ます。その佛様

の淨聖は、有難くもこの世そのまゝの處に於て、目覺める處の何處にでもある。私は一昨年の七月に病氣をし、布團の上に横たはつて居りました。大變に暑い時でありまして、寢てゐても汗が後から〳〵出、一日の中に浴衣を何枚も着換へました。併し今思ひましても有難いことには、その時にかういふやうな歌を詠みました。

涼風は時をわかたず吹き入りぬ日は水のごと流れ行くまゝに

涼しい風は、朝と云はず、晝と云はず、夜と云はず、吹き込んで來てくれる。日は一日々々と水のやうに何のわだかまりもなくすら〳〵と流れて行く。苦しんで居りましたその時にも、淨聖の風、淨聖の日は、訪れて來てくれます。淨聖のある處この世はそのまゝ淨土です。而して「觀世音は淨聖にして、苦惱死厄に於て、能く爲に依怙と作る。」觀音樣のことを思へば、觀音樣は淨聖にして能く依怙となる。他の佛樣のことを思へば、同じく淨聖にして能く依怙となる。佛樣は淨聖にしてこの世に救ひの手を垂れ給ふ。

凡ての人の生涯は先程も申したやうに、遂に四國遍路、西國巡禮とかはりはない。さうして金剛杖を吾々の手に色々な處から持たせてもらつてゐることが多い。情ある人は「お前はそれでは危いぞ。この杖を持て。」と金剛杖を授けて下さる。併しながら、この旅でこの杖を渡されても、多くはこれを先づ玩具にする。こんな杖があるんだが、振り廻してみたらどんな塵梅だらう。これは輕いな、重いな、長いな、短いな、と玩物にする。今は暫く其處へ置いておかう。今は入用はない。まだ若いのだから杖の必要はない。折角くれたが戸棚へしまつておかう。一寸伊達について歩かうかな。始めはこれを弄び、次にはこれをついてみる。その

内にこれを力として歩くといふことになつて來る。道は險しく、道は淋しく、人間の旅の危さを感ずる時に、玩具にしてゐた金剛杖を力として歩み出す。金剛杖は佛樣だ。金剛杖はたよりとなる柱です。金剛杖は生きて行く力です。かくて佛樣の佛樣たるところが分つて來る。分らない間は仕方がない。マア精出して難儀をして御覽なさい。精出して淋しい思ひをして御覽なさい。精出して情ない思ひを重ねて御覽なさい。金剛杖がほしくなりますよ。金剛杖を力とする時が來ますよ。さうして最後にどうなつて來るでせうか。全く杖だけの旅となる。人が金剛杖をつき、金剛杖を力とし、最後に金剛杖のみとなつて、我が身が金剛杖の中に隱れおほせてしまつた時、我が身がその杖一本の中にめり込んでしまつた時、その時に人は始めて大丈夫な人となる。生きる力が本當に確かにその人に具はつて來たのです。繰返して言ひます、人間の旅は、始めは金剛杖を弄び、次には戯れにこれをつき、次にはこれを力とし、次には全く杖のみの旅となる。

これは物の眞實を語る處でありますならば、常に言はるべき事柄です。殊に私共が常に唱へて居ります事は、文藝と宗教とは名前こそ違へ、その現れ方こそ場合に依つて小さな違ひはありませうが、全く同一であるといふ事です。文學藝術はそのまゝ宗教であり、佛教である。それを會得させる爲に、私は毎日若い人達に私の聲を傳へてゐる。例へば、日本の舞に就いて考へて御覽なさい。扇子を持つて舞ふといふのが日本の舞の常であります。舞手が扇子を持つて立ち上れば、その扇子一本の中にその人全體が隱れてしまふ。その人全體が扇子一本の中に納まる。唯その人ばかりではない。一切の世界は手に持つ一本の扇子の中に納まる。その位扇子が生きて働いて來るやうでなければ本當の舞は出來ない。こ

の扇子は今お話をして來ましたその金剛杖と一つものです。飆を使ふ人は、一本の白刃の中に自分も隱れ、天地一切の物までがその中に包み込まれてしまふ、といふところまでに至らなければ、劍道の名人若しくは達人とは言はれない。一切の事柄は皆是れです。特に狹い言葉の意味での文學藝術に限らるべきものではない。この吾々の日常の生活、その生活の舞を吾々は何處でもつて納めてゐるか。吾々のこの毎日の生活の踊を何處で納めてゐるか。それを一本の金剛杖の中に納めてゐるやうでなくては、人は本當に世渡りをしてゐるとは言はれない。舞臺に立つ藝人は、どうかしてこの技が上手になつてくれゝばよい、どうかしてこの藝が冴えたものに進歩してくれゝばよい、と隨分恐ろしい苦しみをして修業を續ける。吾々の一般の生活の舞にしても、この舞を立派にやつてのけたい、立派に舞ひ納めてみたい、といふ志がないならば、生きてゐるとは言はれない。而も扇子を持つ舞手は、森羅萬象をその中に包んでゐる。劍を持つて立つ人は、その中に天地の凡てを包んでしまふ。さうして金剛杖を持ち、魂の柱を持つ。吾々の生活の舞に於て、それなくしてどうしませう。御遍路さんは正直に金剛杖をついて、同行二人で歩いて行く。私達の日常の生活の旅でも、皆果して金剛杖をちやんとつき、同行二人で毎日歩いて居りますか。この一本の杖、一本の柱、こゝに自分を投げ込んで、そこに生き行く力を見出すといふことは、それは實際佛の道にかなうたことです。お釋迦樣は衆生を濟度なさらうと、あのやうな難行苦行をなされ、それを成就された。その時から佛樣は金剛杖を一本宛私達へ渡して下さつた。しつかりと與へて下さつた。頼みある世を送り、賑やかな世を送り、嬉しい世を送り、有難い世を渡るやうにと下さつた。これが成道の本義です。

私はもう一度繰返して申します。人間の旅は、始めは金剛杖を弄び、次には戯れにこれをつき、次にはこれを力とし、次には全く杖のみの旅となる。金剛杖を弄び、これをつき、これを力とするといふところまでは、大抵の人にあり得ることでありますが、全く杖のみの旅となるといふことは、誰れにでもとは言ひ得ない。それは杖になりきつてしまつてゐることでなければならない。その杖になりきるといふ爲には、どうしても自分の身を其處へ放り出してしまはなければならない。聖者は常に私達に體も心もそつくりと放り出してしまへと教へる。所謂放下といふことです。私の言ふ金剛杖の中への放下です。道元禪師はお弟子の方にかういふことを言つて居られる。

一日示して云く、佛法の爲には身命を惜むことなかれ。俗猫を道の爲には身命をすて、親族をかへりみず忠を盡し節を守る。是を忠臣とも云ひ賢者とも云ふなり。云々。佛道には慈悲智慧本よりそなはる人もあり。設ひ無きひとも學すれば得なり。只身心を俱に放下して、佛法の大海に廻向して、佛法の教に任せて、私曲を存することなかれ。

「只身心を俱に放下して、佛法の大海に廻向して、佛法の教に任せて、私曲を存することなかれ。」體も心も佛法の大きな海にさらりと投げ込んでしまひ、佛の教のまゝに任せて、間違つた自分料簡を懐いてはならない。このお言葉は悉く私達へのお言葉として受取つて考へなければならないことです。これは道元禪師のお弟子懐奘といふ方の編まれた道元禪師の語錄「正法眼藏隨聞記」といふ書物の中にあります語ですが、その先にかういふ事も言つてあります。

示して云く、學道の人は吾我の爲に佛法を學することなかれ。只佛法の爲に佛法を學すべきなり。

自分の爲にとて佛法を學ぶやうではいけない。我れといふものゝ角が出てゐるやうでは駄目だ。つまり金剛杖一本になりきつてしまへといふことです。もう一度御遍路さんの例を引いてみますと、御遍路さんは同行二人で、大師樣が附いて居られる。二人連れである、併し二人連れと云つてゐる時、もう片方の自分といふものは殆ど消えてなくなつてしまつてゐる。消えてしまつて居ればこそ足が腫れても險しい道が歩ける。常ならば到底堪へきれないやうな難行苦行が凌げる。自分といふものがあつて、どうしてさふいふ力が出ませう。足が痛いから、足が腫れてしまつたから、膝がく〳〵なつてしまつたから、もうこれでは歩けない。これが常です。けれども、さうなつた自分が專ら金剛杖に縋つて歩けるならば、唯縋るだけであるならば、この場合の同行二人とは申されません。その我れが杖の中にはひつてしまふ。唯嬉しく、唯有難く、淨らかで、尊い。而もこの心は普通の樂な生活の中では容易には見出されない。何故ならば、普通の樂な生活の中であると、自分といふものが現れて來ますから、假令金剛杖をついてゐても、杖は自分と離れた處にあつて、その中に自分を叩き込むことは出來ない。同行二人の他の一人の中に自分を投げ込むことが出來ない。さういふやうであれば、賑やかな處に居ても淋しく、富める處に居ても貧しく、健やかな處に居ても病む。佛樣の敎は正しくその杖をしてその杖たらしむるところにある。佛樣はその杖を吾々に下さつた。お釋迦樣の成道はその杖を確かに吾々一人々々の處へ下さる成道であつた。

此處で特に申して置きたい事は、自己の體と心とを投げ込んでしまふ、所謂放下してしまふ、それが南無阿彌陀佛或は南無妙法蓮華經などと云ふ時の南無となつて現れるといふ事です。南無といふことは正しく我れを放下することです。それも出鱈目に投げ出すのではない。佛の金剛杖の中に投げ込むことです。南無あつてこそ金剛杖が力となるばかりではなく、生き行く生命そのまゝとなつて來る。佛法はその南無から離れることは出來ない。お釈迦様は成道に依つてこの南無で響き渡るその生命を私共に授けられた。南無とは斯の如くに暖やかな言葉である。斯の如くに頼もしい響である。而もこの南無は更に「信」の一字ともなる。如何なる宗教が信なくして成り立ち得ませう。信のない佛法がありませうか。信のない成道がありませうか。南無は即ち信。吾々は南無に依つて生き、吾々は信に依つて生きる。生きる力は南無であり、生きる力はこの信であります。

宗教が悟りに依つて生きるならば、文藝も悟りに依つて生きて來ます。悟りのない文藝は魂のない體だけの文藝です。實際、勝れた藝術家の藝術談は吾々に面白いばかりではなく非常にためになる。それも藝道の悟りといふ處から來るからです。さういふところから私はさういふ方面の事には何によらず常に非常に興味を持つて居りますが、今此處に少しお話致したいと思ひますことは、私が先頃讀みました本田秀男氏の「櫻間左陣夜話」と題してありますものゝ中にある明治時代の能樂の名人の一人左陣翁の話されたといふ話です。

論の稽古でも、舞のけい古でも、數多くやつたとて、決してうまくなるものではない。一枚でも半枚でも、それを大切に論ひ、大切

に舞つてこそ、上達はするのである。數多くやれば終には粗雜になつて、かへつて惡いものが出來上つてしまふ。數よりも、これ限りと大切に論ひ、且つ舞ふことが第一である。

この中の「これ限り」といふ言葉はどの位强い力で響いてゐるか分らない。これ限り、これは命懸けです。ぞんざいでも澤山のものが後からく いくらでも出來ると考へたならば、油斷もありませう。粗末な自分といふものも、躍り出して來るでせう。これ限りといふことになつて來ますと、自分の全體を放り出したことになつて來る。何に向つて放り出すか。藝道の一番大事な處に向つて自分を放り出すのである。先程申した言葉で言へば、御遍路さんの金剛杖、此處で言へば藝道の金剛杖、そこへ自分を放り出す。道元禪師のお言葉で申しますと、佛法の爲には身命を惜むことなかれ。これが、これ限りと大切に論ひ且つ舞ふことです。

この意氣です。一枚でも半枚でも大切に論ひ且つ舞つてこそ上達はするのである。この心持が極めて平たい言葉で書き現されては居りますが、眞實の藝道に嘘はない。信の道、南無の道、即ち佛法の道です。尙かういふ事が書いてあります。

人がよく寒稽古だ〳〵といふけれども、自分はそれよりも暑中稽古をすゝめたい。又暑中稽古よりも常の稽古をより以上にすゝめる。常の稽古が不充分であつて、寒稽古や暑中稽古をいくらしても、大した効能はあるものではない。常の稽古が大切だ。寒稽古もいゝ、暑中稽古もいゝ。寒中單衣一枚で汗の出るほどにやれ、暑中綿入れを着て汗が出ぬやうになるまでやれ。それでこそ、はじめて寒稽古、暑中稽古の眞に至るものだ。

これは何です。捨身でせう。もう一度先程申した事を言つてみましても、

身命を惜むことなかれ、といふことが佛法の大切な教であるやうに、身命を藝道の爲に捨てる。その覇の强さ。而もこの教の中には、寒稽古だの暑中稽古などと言ふよりも平常の稽古が大切だ、といふことが言つてある。これを今此處のお話の處へ移して見れば、平常心是れ南無です。禪の方には「平常心是道」といふ名高い語があります。道と言つても特別の處にあるのではない、毎日の心が即ち道になる。これを此處へ移して言へば、「平常心是南無」金剛杖も特別に遍路に出る時のみに必要なのではない。平常心是れ南無、佛法は平常心の中にある。釋尊の成道から授けられた光明は平常心の中にある。

左陣翁は尙面白いことを言つて居ります。

諭に拍子の心持ちがなかつたらだめだ。又なまじに少しカジツたら尙いかん。お前達も拍子をけい古するのは決してとめない。その

かはりに、その拍子を忘れるまでに、稽古しなければいけない。でなければ、全然しらずに自分の力によつて拍子を引ッパツて行け。面白い言葉です。拍子に釣り込まれ、それに捉はれて上の空になつてしまふやうでは駄目だ。要するに自分といふものを藝道の金剛杖の中に投げ込んでしまふ意氣。その意氣といふものは、よそからくつゝけた拍子を以て引き摺つて行けるものではない。拍子を忘れるまで稽古しなくてはいけない。此處には學生の方、或は學問を毎日の仕事にして居られる方もありませうが、これは學問にも直ぐ當嵌まる。これを學問に直してみませう。

人に學問の心持ちがなかつたらだめだ。又なまじに少しカジツたら尙いかん。お前達も學問をけい古するのは決してとめない。そのかはりに、その學問を忘れるまでに稽古しなければいけない。でな

ければ、全然しらずに自分の力によつて學問を引ツパツて行け。左陣翁の言葉はかう換へてみることが出來るでせう。學問を少しばかり齧つてふら〳〵して居る人は澤山あります。それよりは、學問など何も知らないで、學問を引つぱつて行く自己の金剛力を發揮し、生活の金剛杖をつき立てゝ、ぐん〳〵とのして行く者の方が本當に生きてゐるのです。私共學問をする若い人達に始終接して居ります時、常にその感を深くする。これは誰れでもさういふ方面では考へなければならない問題です。學問であらうと、藝道であらうと、その他の事であらうと、道は一つ。即ち自分の全體を投げ込んで行くといふことが、自分の力で拍子を引つぱつて行くといふ處まで來るのです。自分の力と言つてみても、金剛杖のない處に自分の力を出しても、その力は知れたものです。自分の力で引つぱつて行く、――かういふ力の働く處には、ちやアんと佛樣のお力がはひつてゐる。廣大無邊の處から生き行く力がちやアんと注ぎ込まれてゐる。同行二人の他の一人がちやアんと其處で働いてゐるのです。下手な學問をし、下手な理窟を揑ねてゐる人より、何も知らないでお念佛を一心に唱へてゐる信仰心の强い人の方がどの位强いか分らない。かういふ事は藝道にもちやんと叶つてゐる。

序にもう一つ私が大變面白いと思ひました左陣翁の話を前の「夜話」から引いてみます。

實さんの藝は、實に和らかい良い藝であつた。狂女物のキリで斯う（その型をして）持つて來た手の、子を抱くやうな型の味ひは、實に結構なものであつた。あれだけはとてもまねられない。今だに目にのこつてゐるが、中々そこまではゆきつけない。他のことなら中々ひけはとらぬと思ふがナア……。

實さんといふこの人は明治の能樂界の名人梅若實翁のことであります。

「拍子を忘れるまでに稽古しなければいけない。でなければ、全然しらずに自分の力によつて拍子を引ッパッて行け。」とまで強い事を敎へてゐる人、寒稽古をするなら單衣一枚で汗の出る程やれ、暑中稽古をするなら綿入れを着て汗の出なくなるまでやれ、と嚴しい事を言つてゐる人、その人の行く道は、その人の目ざす處は、實翁への讃辭の「和らかい良い藝」であつた。行方の知れぬ我が子を慕つて狂ひ尋ねてゐた母が偶〻その子に廻り逢ひ、我が手の中に戻つた子を抱く形のうるはしさ、その型の美しき限りを實翁は見せた。玉のやうな姿、佛心の玉のやうな美しさ。而もそれは「和らかい良い藝」の玉の如き和らかさと、玉の如き良さとに歸する。力強い和らかさです。張りきつた和らかさです。名人は能く名人を知る。「あれだけはとてもまねられない。今だに目にのこつてゐるが、中々そこまではゆきつけない。他のことなら中々ひけはとらぬと思ふがナァ……。」

釋尊の成道は十二月八日である。六年間の御辛苦の後、この生活の光明を我がものとされ、それを衆生にお施しになつた釋尊は、魂の金剛杖を、生命の金剛杖を、生きる力の金剛杖を、吾々衆生に一本宛下さつたばかりではない。あの尊い和らかい生命の玉を私共の生活に下さつた。私共はその杖を力強くつかねばならない。私共はその玉を明らかにして持たねばならない。これがこの成道會に際し、現在及び將來に向つて、私共が油斷なく更に〳〵工夫しなければならない大切な事の一つであると思ひます。

第二講

今日も昨日に引續きお話を致します。

此處においでになりますお釋迦様（この日講壇に掛けられた掛軸の佛像）――此處においでになると私が申し上げます時、私は決して繪に描かれたるお釋迦様のことを申してゐるのではありません。皆さんがかうやつて御覽になつておいでになるお釋迦様は、繪のやうになつて見えて居りますけれども、ちやんと肉を具へ、骨を具へ、血が通ひ、全く生きた佛様のまゝでこの席へおいでになつてゐるのであります。生きたお釋迦様の前に、甚だ失禮なやうでありますけれども、私は此處に立たせていたゞき、私のお話を暫く皆さんに聽いていたゞきたいと思ひます。

この生きた佛様が出家をなさいましたのは、或は十九歳、或は二十九歳と申され、成道をなさいましたのは三十歳或は三十五歳と申されますが、何れに致しましてもお釋迦様は十二月八日明けの明星を御覽になつて、薄い膜が破れたやうにパッと明るい世界へお出になつた。さうしてお悟りをお開きになつた。「明星出づる時廓然大悟」といふのがその時の有様であります。廓然とは廣々としてわだかまりのない、朗らかな、大きな、明るい感じの言葉。廓然と大きな悟りをお開きになつた。廓然大悟。何のわだかまりもない廣々としたかういふ明るい嬉しい悟りがお釋迦様のお說きになりました教、お釋迦様がお住みになりました世界、――否、永久にお住みになります世界がさういふものであります。この廓然大悟の一語が分つてまゐりますと、佛敎くらゐ明るいものはなく、佛敎くらゐ大きなものはなく、佛敎くらゐわだかまりのないものはない、本當に晴れ〳〵としたものであるといふことが直ぐ分る。明星出づる時廓

然大悟――この一語に出會ふ時、私は身の内に血が躍るやうな氣持がします。大悟は大光明です。これに會つて光を直ちに感じなければ、悟りの一字は生きて來ません。

日蓮聖人の四條金吾女房への御書の中に、

闇なれども燈入りぬれば明かなり、濁水にも月入りぬれば澄めり。

といふお言葉があります。私共かういふ言葉に出會ひますと、本當に嬉しい氣持になる。何故でせう。それは光があるからです。闇を破る生命の光があるからです。闇でも明りを一つ入れゝば、その闇は明るくなつてしまふ。何時の間にかその闇は何處かへ行つてしまふ。濁つた汚い水であつても、月の光がさし込めば、月が宿れば尙更のこと、水はそのまゝ澄んでしまふ。かういふ光の喜びが悟りといふことなのです。それ故に悟りには先づ喜びがある。理窟よりも先づ喜びがある。悟りに伴ひ無條件の喜びの出て來ぬものは、極めて安價な悟りです。「明星出づる時廓然大悟」――私は先づ此處に大いなる歡喜を感ずる。

悟りは又覺りであつて、覺りは即ち目覺めです。又開眼といふことです。開眼は又成道、成道は成佛です。さうして佛とは覺者といふことです。お釋迦樣は十二月八日明けの明星を御覽になつて、はつきりとお眼が覺めた。覺は覺めるといふ意味にもなるし、覺るといふ意味にもなる。覺めることも覺ることも同じ事です。普通には、覺めると云へば肉眼が開いたことになり、覺ると云へば心眼が開いたことになる。けれども、體の眼にしましても、心の眼にしましても、覺める味は變らない。丁度光が闇にはひつたやうに、水に月がはひつたやうに、明るく四方が見えて來る。さうしてそれに伴つて歡喜が附き纏ひ、光明が附き纏ふ。人間

の第一大事は眼の事です。世間には肉眼の潰れてゐる方は澤山にある。肉の眼は潰れましても、もう一つの大きな眼――心眼があればまだ大丈夫。肉の眼は健やかでも、心の眼の潰れてしまつた人もある、これはさういふ人よりも悪い。凡ては眼の世界の事。どんな風に物が見えるか。はつきり眼が明いてゐるか。寐惚けてゐないか。さういふ事でお互が始終骨を折つてゐる。すつかりと眼がお覺めになつたお釈迦様は、私達をあの細いお目で見ておいでになる。私達はまご〳〵して盲人の有様を何時までも續けてゐてよいものではない。お釈迦様は「お前達は何時眼が覺めるのだ。眼が覺めずに何時までも日を暮してゐていゝのか。」と、お憐れみになり、お叱りになり、此處にかうしておいでになる。目覺めた人にはお釈迦様は「よく眼が覺めてくれたな。お前は俺の本當にかはいゝ子だ。俺の氣持が分つてくれた。」と喜んでゐて下さるでせう。「廓然大悟」――お釈迦様ははつきり目覺めておいでゝす。

先達私は文部省宗教局内佛教音樂協會の依頼を受けまして歌を二つ作りましたが、その一つの題を「目ざめ」とし、他の一つを「かくれんば う」と致しました。「目ざめ」の方はかうです。

目ざめ

一　よるの　ゆめ
　　ねむり　みだれて
　　さむる　とき
　　こころ　すくはる

二　うつし　よの

生きるカ

しげき　ゆめみに
すくひ　とは
めざめ　なりけり

三

きよき　みづ
つちを　ながれて
このよ　いま
われに　さめたり

四

とはに　さめ
ほとけ　きましぬ
つきは　みよ

くもを　いでたり

（山田耕筰氏作曲）

或晩私は何だかいやな夢を見た。どんな夢を見たか覺えて居りませんが、誠に氣持が惡かつた。さうして早く目が覺めました。まあ夢でよかつたと思つた。さういふ事は皆さんも時々經驗される事であらうと存じます。夢でよかつた、と思ふのは、目が覺めてよかつた、と思ふことです。この夢が夢のまゝですうつと押し通されてゐたのでは實際やりきれない。さういふ事が一晩ありまして、目が覺めましてから歌をこの實感から引き出して來ようと思ひまして作りましたのがあの歌です。それですから第一節には「よるの夢　眠り亂れて　覺むる時　心救はる。」本當に、救はれたといふかういふ時の感じは、胸にこたへる程のものです。第一節の一夜の夢の實感を第二節で人生の夢の實感に移して來まして、

「うつし世のしげき夢見に救ひとは目覚めなりけり。」世の中の救ひといふことも、つまりは目が覚めることだ。目を覚さずして夢の中でどうか助かりたいと言つても、逃げ出せば足はおそく、聲を上げても聲は立たない。それは惨めな有様です。けれども一度目を覚せば、明るい世界の中にあつて、今見た悪夢は消えてしまふ。其時のこと、第三節は

「清き水土を流れて　この世今　我れに覚めたり。」吾等の履む土、吾等の住む土、吾等の日々の生活の土、その土の上を綺麗な水が清く素直に流れて居る。この世が我れに覚めたのだ。第四節「とはに覚めほとけ來ましぬ　月は見よ　雲を出でたり。」覚めてまた夢を見る覚め方をするのではない。佛様は永久に目覚めて居られる。あの美しい月はどうだ。あの浮らかな月はどうだ。今、雲を出て、水のやうな涼しい光を吾々の處へ注ぎかけてくれる。

この月といふことを現します時に、浮らかといふことが直ぐに聯想される。美しいと言ひましても、赤い色で美しい、黄色い色で美しい、綠で美しい、紫で美しい、さういふところから感ぜられる美しさではなくして、色のないやうな純白な光の中からして浮らかといふ感じが一番先きに飛び出して來、それに美しいといふ感じが出て來る、あの美しさです。「廓然大悟」といふ時の廣々とした明るさを思ふ時にも、白光の中に一つの塵をも留めない浮らかさ、美しさ、が思はれます。佛様の世界は太陽の世界にして又月の世界であることを忘れてはならない。「目ざめ」のあの私の歌の世界で、私の心は月に引かれた、白光の眞如の月の目覚めに引かれた。

お釋迦様のお目覚めの成道の時の情景は因果經に書いてありますとこ

ろに従つて申してみますと、

時に、大地、十八相に動き、

十八通りに大地が動いた。十八相といふのは、大、中、小、各六通りの動き方があつたので、凡て〻十八通りの動き方。大地が大、中、小各六通りといふやうな大小の種類を盡したあらゆる動き方で動いたといふことは、大變に面白い、又行き屆いた物の感じ方と、私は大變興味を持つて居ります。これに就いては私の書物の中に書いて置いたこともありますが、先づこの動くといふことは生命のある證據です。生命のないものは動かない。死んでしまつたものは動きません。肉體であらうと、精神であらうと、生きてゐる限りは必ず動く。それ故に、動くといふことは、生きてゐるものが其處にあるといふことの何よりも明瞭な證據です。ところで天地萬物はその實相から眺めた時に如何なるものかと申しますと、

悉く是れ宇宙遍滿の不生不滅の生命の現れです。それでありますから、この世に一つのものがあるといふことは、そこにそれだけの生命の現れがあるといふことです。お釈迦様のお目覺めも第一にこの生命の世界へのお目覺めです。凡ては現す者の處で現れます。目覺ます者の處で目覺めます。お釈迦様のお目覺めと共に、大地もその生命に覺め、生命の動きを明らかに現すといふことに何の不思議がありませう。生きてゐる大地です。お釈迦様を載せてゐる大地です。一切衆生を載せてゐる大地です。吾々が一日として離れることの出來ぬ大地です。これがお釈迦様の大いなる生命の目覺めの事實に感應してなほ動かぬといふならば、それこそ却て不思議である。そんな時に地震があつたといふやうな記錄は別にない、などと言ふ人がありますならば、それはまだ生命の意味を知らない人であります。私がかうやつてこの席からお釈迦様のお話を通して

生命の光を皆さんの處へ投げ込んで居ります時、皆さんの中には御自身に動き出して來たものをお感じになる方もありませう。皆さんの胸の中には、皆さんの體の中には、私が今投げ掛けて居ります生命の力に應じて動くものがないでありませうか。

續いて、

遊霞飛塵、皆悉澄淨し、天鼓自然に妙聲を發し、香風徐に起りて、柔輭清凉に、雜色の瑞雲より、甘露の雨を降し、園林の花果、時を待たずして榮えぬ。

揺れてゐる霞、飛んでゐる塵は皆悉く清淨。空には微妙な音樂が聞えたかういふ事を言ひますと、それは文學上の修飾で、さう言へばその時の樣子が能く分るからである、といふやうに思ふ人があるかも知れない。併しそれは生命の意味を知らない人です。この世界が如何なるものであるかといふことを知らない人です。世界は只今申したやうに悉く生命の世界である。生命の世界であるが故にその世界は動く。併しそれは決して出鱈目な動き方をするものではない。それには定まつた法則がある。生命は動くが故に聲を發する。その聲はかの法則で整へられて音樂となる。生命の動きは音を呼び起し、その音は音樂を呼び起す。眼を開き、この生命の世界の鼓動を正しく感ずることさへ出來れば、世界は音樂の世界です。それですから佛樣の事に就いては、天の音樂といふことが附き物のやうに始終出て居ります。天の音樂とは自然の音樂です、宇宙の音樂です、宇宙の生命の音樂です。「天鼓自然に妙聲を發し」です。誰れが鳴らすといふこともない、生きてる天地が自然に音樂を奏でるのです。「雜色の瑞雲より、甘露の雨を降し、」――これは形容だらうと思ふ人がありましたら、それは自分の愚かさを暴露してゐるのです。甘露の雨とは

どういふ事になつて來るのでせう。生命には必ず美しい光と共に潤ひがある。その潤ひが降り注ぐ時、それは甘露の雨となる。これも空の音樂と共に少しも不思議な事ではない。

「園林の花果、時を待たずして榮えぬ。」――これも異樣な事ではない。美しい天地の生命が十分に光を放つて現れた時、其處には不滅の花が開き、其處には香しき木の果が結ばる。凡てが生命の花、凡てが生命の果。尙其處には色々の美しい天華も降り、天人も樂を奏す。

又、曼陀羅花、摩訶曼陀羅花、曼殊沙花、摩訶曼殊沙花、金花、銀花、琉璃等の花、七寶の蓮花を雨らし、菩提樹を繞ること、滿三十六踰闍那（踰闍那は印度の里數又由旬とも云ふ。一由旬は六町一里の支那の里數にて三十里又は四十里などと云ふ。）なり。この時諸天、天の伎樂を作し、散花燒香し、歌唄讃嘆し、天の寶蓋及び幢幡を執り、虛空に充塞して、如來を供養す。龍神八部（佛法の守護神）

の、設くる所の供養も、亦復是の如し。

自然の生命の爛漫と咲き亂れての大歡喜。これが廓然大悟のあの生命の夜明けです。これをお釋迦樣お一人の事としてお考へになつてはいけない。誰れでも本當に開眼が出來れば、かういふ事が自分の體驗となつて現れて來る。この文字通りの事に囚はれる要はない。而も世界は天も地も一つとなつて萬人の成道を祝福する。「さういふやうになれ。人間と生れて來た以上、さういふやうになれ。さうなつたか。」とお釋迦樣は皆さんに語つておいでになります。

私が佛教音樂協會の爲に先達作つたといふもう一つの歌「かくれんばう」といふのはかういふのです。

かくれんばう

一　みほとけ　さまは
どこ　だらう
みんなで　けふは
かくれんぼ

二　よしよし　そこだ
その　かげだ
おにさん　そつと
のぞいてる

三　みほとけ　さまは
その　かげで

ちいさい　はなに
なつてゐた

（本居長豫氏作曲）

この「かくれんぼう」で鬼は一般衆生です。この衆生は佛様は何處だらう〳〵と探してゐる。探してゐるのは未だ目の覺めぬ間のことです。そつと覗いて見るといふと、佛様は小さい花になつてゐた。佛様と衆生とがかくれんぼうをしてゐる時には、かういふこともあらうと思ふ。佛様は花でもあります。佛様は鳥でもあります。佛様は探してゐる鬼そのものでもあるのです。併しこの場合は、かはいらしい子供の歌でありますので、かはいらしい小さい花になつてゐます。この花はお互の心に咲きます。この花の咲きます時は、やはり目覺めの時である。本來吾々銘々には佛様になる種子がちやんと植ゑ附けられてゐます。それ故に眼が

開けば吾々は皆佛様と同じ境地に立つことが出來ます。「自性清淨」と申しまして、一切のものゝ本性は清淨といふことになつて居りますが、かういふ語は大變面白いよい語だと思つて喜んで居ります。

慧能大師と申して禪の方で達磨大師から六代目の祖、從つて六祖大師と稱へられてゐるお方の言はれたことを書き留めた「六祖法寶壇經」といふのがあります。その一番始めの處にかういふ語があります。

菩提の自性は本來清淨なり。但此の心を用つて直ちに了して成佛せよ。

萬物自然の本性は佛性にして清淨である。たゞこの心そのまゝを目覺まして佛になれ。この事です。成道と申しても、成佛と申しても、悟りと申しても、目覺めと申しても、自らの持ち合せてゐる本性そのものを以てゞよい。餘所から借りる必要はない。買つて來る必要はない。世の中に自分の持つてゐるもので始末がつくといふ位、世話のないものはない。餘所から借りて來ようとすると、今使つてゐるから都合が悪いといふかも知れない。買つて來るにしても、それに代るだけのものをやらなければ渡してくれない。他を俟つてのことならば差支へるかも分りませんが、自分の持つてゐるもので片が附くといふのですから、こんな容易い事はない。人は一番手近にあるものを一番粗略にしてゐる。一番手近にあるものを粗略にして、遠方のものを欲しがつて、齷齪し、まご〳〵し、何も獲物がないと言ふ。「菩提の自性は本來清淨なり。但此の心を用つて直ちに了して成佛せよ。」此の心といふ此の一字に眠りを破る聲がします。

この心の持主で吾々は皆佛になれる、吾々はかくあるやうに生み出さ

れた、――この事を思ふ時私達は唯々驚くより他はない。不思議なものだ。何といふえらいことだ。さうしてかう驚いた時は、もう一歩踏み出した時です。もう一歩踏み出した時であるから、その調子で行きさへすれば、それでそれは成就する。お釈迦様はにこ〳〵されて、その事の成るのを御覧になつておいでになります。

私は或人から何か書いてもらひたいと言はれました時に、

念々成佛天下春

と書いて渡したことがありました。一念々々に佛となる。一念々々が成佛で、一念々々の連續が成佛の連續であれば、天下の春の浄土の景色。天下の春にお釈迦様の成道の時の花も咲く。

お釈迦様が悟りをお開きになつた時にお唱へになつた偈（偈は佛教の方で言ふ詩でありますが）、悟後の偈といふものが、法句經の中にあります。

屋舍の工人を求めて、之れを看出さず、多生輪廻界を奔馳して、轉た苦の生死を經たり。

生れては死に、死んでは生れ、これを繰り返す輪廻の苦しみ。誰れが一體この家を建てた大工なのだらう。これを見つけても見つからずして、幾度となく苦しい生死の輪廻を經て來た。――かういふ意味です。次の偈に、

屋工、汝今看出さる、再び家を構ふることあらじ、汝の桷材（たるき）は總て破られ、棟梁むなぎ、うつばり）は毀たる、滅に至れる心は諸愛の滅盡に達せり。

その大工も今見つかつた。もう〳〵家は建てない。たるきでも、むな木

でも、うつばりでも、皆毀ち棄てゝしまつた。悟つた心は大工である諸〳〵の愛欲を滅ぼし盡してしまつたのだ。――愛欲は大工、苦の輪廻は煩悩の建てた家、而も廓然大悟と共に現れた夜明けの世界は、造る世界ではなく、造られる世界ではなく、煩悩愛欲の大工をば要せぬおのづからの世界です。あの曇ることなき晴れ〳〵とした生命の世界です。あの清淨の世界です。

佛教の「諸惡莫作、諸善奉行」即ち諸〳〵の惡い事は爲すな、諸〳〵の善い事は行へ、といふ語は廣く世間に知れ渡つてゐる言葉であります。これも法句經にありますが、これは、

諸惡莫作　諸善奉行　自淨其意　是諸佛教

「諸〳〵の惡は作すことなく、諸〳〵の善は奉行し、自ら其意を淨くする、是れ諸佛の教なり。」とあるものであります。これは有名な偈ではありますが、これでは普通の道德上の教であつて、特に佛教の教、宗教の教を俟つまでもない、と思はれ勝ちのものであらうと思ひます。私がこの偈の中で一番の急所だと思ひます處は、「自淨其意」（自ら其意を淨くする）の淨の一字です。佛教の光、宗教の力、はこの「淨」で常に著しい威力を發します。成程「諸惡莫作、諸善奉行」（諸〳〵の惡は作すことなく、諸〳〵の善は奉行し）といふだけの處に重點を置きます時には、佛教のあの逞しい翼は折れて、地上を離れることの出來ない常の道德ともなりませう。宗教の「淨」の意味は偉大です。これには善惡の差別をさへ唯一つの至善で滅する程の威力があります。それですから、この偈に第三句の「自淨其意」のあることは、この偈に魂を入れたことになるのであります。宗教と道德との區別の前で私達は躊躇するまでもありません。宗教は體全體を以

て立ちます、道徳はその手足となつて働きます。善惡を說くことは、手足の働きを說くことです。「淨」の一字で立つことは、體全體で立つことです。立つ體も手足の働きは尊重します。手足の働きあつてこそ體も立派に立てませう。併し廓然大悟の成道は、その大いさは、その明るさは、「淨」の一字に籠つてゐます。

昨日は觀音經の「觀世音は淨聖にして、苦惱死厄に於て、能く爲に依怙と作る。」といふ句に就いてもお話を致しました。この有難い觀音樣は淨聖の佛樣でおいでになる。こゝにも見える「淨」の一字。觀音樣の有難さも皆この淨聖から發して來ます。「淨」の一字、これこそは佛の力。私共は色々佛敎の尊く有難い言葉を拜見して居りましても、「淨」の一字、これ程大きな徹底した力の言葉にぶつかることは滅多にないと申されませう。觀音樣がこの脆き人間の杖柱となつて下さるのも、淨聖なるからであります。かういふ事は本當によく考へて置きたいものだと思ひます。

お釋迦樣の成道は淨を疊らす諸愛の滅盡。此處に淨土は明らかに日の如くに現れて、此處に萬物は再生し、眞の姿で再現します。淨の國以外の處に淨土はない。淨の國にはその他に一物も挾み得る隙もない。淨土、何といふ充實した言葉でせう。淨土、何といふしつかりした言葉でせう。お釋迦樣は、拵へたり、拵へられたり、壞れゝば修繕したり、泣いたり、笑つたりする家の世界を拂ひ淨めて、明らかなる光の中に淨土をはつきりお出しになり、目覺めた世界は淨土であるぞ、とはつきりお定めになりました。悟りといふものは、淨土が我れに現れた、これより他にはないものです。さうして人は何と言つてもやはりさういふ處へ生れたい。さういふ處に住みたい。さういふ處の人となりたい。お釋迦樣は二千五

百年の遠い昔にこの世にお現れになつた方である、而も今日かうやつて成道會を方々で營むといふやうなお力を持つておいでになるのは、如何に凡ての人々が淨土に生れたいと思つてゐるかといふことを、暗々裡に語つてゐます。

前にお話しました因果經にあるお釈迦様の悟後の偈は、かうあります。

聖道は甚だ登り難く、智慧の果は得難し。我、此の難中に於て、皆悉く已に能く辦ぜり。我が所得の智慧は、微妙、最第一なり。衆生は諸根鈍にして、樂に著し、痴に盲ひられ、生死の流に順ひ、其の源に反ること能はず。斯の如き等の類、云何ぞ度すべき。

大勢の者にお釈迦様がこれから救ひの御手を御延ばしにならうと御考へになつた時のお言葉です。此處に力强く響いて居りますものは、「その源に反ること能はず」の源といふことです。佛様は常にこの源といふ處に目が着いておいでになる。源を知らずして騒いで居りますのが一般の世間です。かういふやうな事で衆生濟度のお働きが段々と現れて來るのでありますが、あの偈の中で私が殊に非常に面白く思ひますことは、「聖道は甚だ登り難く、智慧の果は得難し。」とあることです。成程、聖道は登り難く、智慧は得難い。ところが、佛說無量壽經にはかういふことがあります。

佛、彌勒菩薩、諸の天人(天と人)等に告げたまはく、無量壽國の聲聞菩薩の功德智慧は稱說すべからず。又其の國土は微妙安樂にして、淸淨なること此のごとし。何ぞ力めて善を爲して、道の自然なるを念ひて、上下なく、洞達して邊際なきことを著さゞる。宜しく各勤めて精進して、努力て自ら之れを求むべし。必ず超絶して去ること

を得て、安養國に往生せよ。横に五惡趣(地獄、餓鬼、畜生、人間、天上)を截つて、惡趣自然に閉ぢ、道に昇ること窮極なからん。往き易くして人なし。其の國逆違せず、自然の牽く所なり。何ぞ世事を棄て、勤行して道德を求めざる。極めて長生を獲て、壽業極りあることなかるべし。

淨土とはひとりでに無理なく人を牽いて行く處なのでありますから、其處の人となる爲には、そのおのづからの淨き道に素直について行けばよい。これ程樂な事はなく、これ程樂な道はない。それだから行き易い。それだのに、人は逆に〈と行き、遂にそれも分らない。又氣附かずに濟んでしまふ。其處に行くといふことはやさしい事であるものを、何故人がないのであらう。淨土を指さす佛樣の敎は自然にして少しの無理もない。自然の敎です、天地の敎です、その道は少しも歪んだものではない。少しもひねくれたものではない。自然の大道。素直な心を持つた人に、わだかまりのない心を持つた人に、最も手近に見える處は即ち此處の淨土です。其處に見られる自然の道です。眞直な大道です。然るに「聖道は甚だ登り難く、智慧の果は得難し」です。逆に〈と行く衆生が、歩みを自然の道に反せば、即ち淨土の道に反せば、「登り難く」といふ文字は「登り易く」に替つてしまひ、「得難し」は「得易し」に替つてしまふ。その自然に戻すべき、その「源」に反らすべき方法はと言ふならば、昨日それを申したやうに、南無に依つて佛樣へ自分をまるごと投げ込めばよい。この一番の近道が滯りなくすら〈と牽かれては行く自然の道です。凡そ自然に逆ふ者は苦を以て罰せられる。世間苦を解くお釈迦樣は自然の光に目覺めた方です。

一人の光はその一人には留まらず、その外にある衆多を生かす。傳教大師の願文にかういふ力のお言葉がある。

伏して願はくは、解脱の味獨り飲まず安樂の果獨り證せず、法界の衆生と同じく妙覺に登り、法界の衆生と同じく妙味を服せん。

佛樣の世界は明るい。其處に入り込む人は大きい。其處に働く心は廣い。生命の夜明けに自他はなく、南もなく、北もない。前に引いた「六祖法寶壇經」にもかういふ涼しい言葉があります。

人に南北ありと雖、佛性本南北なし。

皆一樣、我れも他も皆一つ。この自然の世界に於て、この生命の世界に於て、この開眼の世界に於て、この成道の世界に於て、この成佛の世界に於て、その大歡喜を知るやうに人は生れて來たのでした。廓然大悟—この朗らかな世界の中で、この廣々たる佛性の中で、無量の生命を樂しみませう。

昭和十一年一月二十日印刷納本
昭和十一年一月廿五日發行

定價拾八錢

東京市小石川區表町八十八番地
發行者 木村玄俊

東京市神田區神保町三丁目十七番地
印刷者 出雲寶太郎

東京市小石川區表町
發行所 傳通院傳通會館
振替東京六〇九三番
電話小石川三〇七番傳通院
五八二五番傳通會館

版權所有

一番館印刷所印刷

終